

怒れる男の回顧録

法学部
法律学科4年

大海 裕也

些細なことで大きな怒りを感じる自分に気づいたのは二十四歳の冬のことだった。

大学を卒業して就職し、親元を離れ上京し一人暮らしを始めてから二年。大学に在籍していた四年間で真つ当な人間関係を構築出来なかった自分が、職場で真つ当な人間関係を構築できないのは至極当然であろう。そんな希薄な人間関係が私を変えたのだろうか。あるいは元々生まれ持っていた性質が顕在化したのだろうか。

原因は分からないがとにかく私が怒りを——それも極度なものを抱きやすくなったのは事実であった。通勤中誰かにぶつかると、足を踏まれる。知り合いの小さな不親切。すれ違いざまの舌打ちや睨みつけ。周囲の笑い声は全て私を嘲笑っているかの様に聞こえた。

私が感じた小さな不快感は瞬く間に心の中に広がっていき、それは怒りへと変わる。全ての人間が私に悪意を持って接しているようにしか感じられないのだ。頭の中のどこか冷静な部分が「相手にそんな

意思はない。全部お前の被害妄想だ」と主張するが、怒りは収まるところか脳天を突き抜けていく。しかし同時に私は一般的な社会常識を身に着けていた大人でもあった。怒りは収まらないがそれに任せて行動すればどのような結果を及ぼすか。想像できないほど私は幼くもなく、直情的でもなかった。

怒りを収めるために私がしたのはただひたすら頭の中で、私に不快感を与えた人物を罵ることであった。思うがままに殴りつけ、壁に叩きつけ、脳天を踏みつける。感情のままに相手に暴力をぶつける。妄想で相手を痛めつけることにより私は精神の安定を得ていた。私の妄想は日に日に過激になっていった。両目に親指を突つ込み力任せに引き裂く。相手の口にブーツで蹴りを入れ歯を砕く。人間の急所に松明を挿入し体の内側から燃やす。相手が女性や子供であっても変わらなかった。相手がたとえどんな女性であっても決して性的な暴力は思い浮かばなかった。ただ純粹に自分の怒りを暴力として直情的にぶつける。

もし私が人間以外の——例えば犬や猫、昆虫などにも怒りを覚えていたら、動物を虐待することにより満足感と精神の安定を得ていただろう。しかし不幸にも私が怒りを感じるのは人間のみにであった。蠅に長時間部屋に居座られたり、野良犬に昼飯を奪われることがあっても不思議と私は怒りを感じなかった。

自己分析してみると——恐らく悪意の有無が大きな要因なのだろう。動物はただ本能のままに行動するのみであり私への悪意は無い。しかし人間には理性がある。私が不快に感じた行為全てはその人間の悪意によるものだという考えが私を支配していた。妄想以外での、現実に行動を起こすことによる怒りの解消方法を得られなかった私は次第に妄想だけでは満たされなくなっていくた。

「現実には人を殺してみたい」

その欲求を自認してしまつた瞬間、心の中に殺人衝動が雪崩のように押し寄せてきた。なにも妄想で

したように派手に、残虐に殺す必要はない。ただ自分の目の前で、自分の手により死ぬ人間がみたい。

頭の中のどこか冷静な部分、あるいは善なる部分が「一時の怒りで人生を棒に振るのか。家族にどれだけの迷惑がかかると思っているんだ」と論しても殺人衝動を抑えるには至らなかった。そして私が犯人だと発覚しないように殺人を行うということで、冷静な部分と折り合いをつけたのであった。

それから私は何者かに取り憑かれたかのように（回顧するに実際に取り憑かれていた様に感じる）殺人計画に没頭した。まずは殺害対象の選別からであった。警察が殺人を捜査する際まずは動機の有無から容疑者を絞り込んでいくという。それを考えると社会的に全く私との接点が無い人物を殺すのが安全であると感じた。街中ですれ違いざまに私を怒らせる人物は数多い。しかし日常生活を送る中でそれを尾行し、素性を突き止めその上で殺害計画を練り上げるのは現実味に欠ける。私は探偵でもなんでもないのだから素性を調べ上げることすら困難であろうし、調べ上げることが出来たとしてもそこから現実的な殺害計画を立案、実行するのは不可能に思えた。

リスクと殺害計画の現実性を天秤に掛けた結果、隣人の杉本という一人暮らしの老婆を殺害対象の第一候補に決めた。この老婆にはよくゴミの出し方

悪いと文句を付けられた。杉本のそれは決して収集員を困らせてはいけなといった正義感に基づく行動ではない。ただただ自分の鬱憤を晴らすため文句の言いやすいところに文句を言ってるだけなのである。杉本とはそういう老婆であった。

休日と有給を利用し杉本を監視する。この老婆は出かけることこそあれど友人や親類に訪ねられることはない孤独な人間であることが分かった。また幸いなことにこの老婆は防犯意識が少々欠けていた。流石に玄関の鍵を開けたまま外出することはなかったが、リビングや台所の小窓（といっても一人通り抜けられるほどの大きさはある）の鍵はかけていることのほうが稀なようだった。この辺りは治安もよくわざわざ窓から侵入する強盗などいない。もしいたとしても盗られて困るものもないと高をくくっているのであらう。これならば夜忍び込み、寝首を掻くことなど極めて容易に感じた。我が家も杉本の家も、周囲に街灯は少なく、隣家ということもあり距離も五メートルも無い。忍び込み事を終え逃げ出す際に目撃されるリスクは低いだろう。

杉本と私の関係は客観的にはただの隣人だ。私がゴミ出しの文句を言われている姿を見た住人はいないはずである。仮に居たとしても殺人の動機と結びつけることはまずないであらう。私は外面よく、はいはいと従っていたためである。第一候補にあまり

にも好条件が揃っていることに私は軽く小躍りしうになった。しかしそのとき頭の中のどこか冷静な部分（もつとも発覚しないように殺害すると折り合いをつけたことにより本来の役目を失っているのだが）が私に囁いた。「いくら動機が薄いとはいえ他の容疑者が捜査線に上がらない限り、消去法的に容疑者として扱われるはずだ」

自分が容疑者として扱われる可能性に気づいた瞬間殺害計画の粗がいくつも見えてきた。第一に二十四年間犯罪と無縁に生きてきた私が警察の目を欺き自然死に見せることなど不可能だということ。絞殺、刺殺等殺害方法の候補はいくらあがるがどれをとっても殺害事件として扱われることは避けられない。そして私が把握している警察の捜査方法の知識はテレビや推理小説で見た偏ったものだけである。いくら痕跡を残さないようにしても思わぬところから私が犯人であるという証拠が出てくるやもしれぬ。それらのリスクを考慮するとまず私が犯人だと発覚しないようにするのではなくそもそも殺害が発覚しないようにするべきだと考えた。遺体も殺人の事実も見つからなければ、殺人事件の前に失踪事件として扱われるはずである。日本の失踪者の内の何割かは発覚していない殺人ではないかとの識者の見解も私を後押しした。

侵入時の痕跡は指紋がつかないよう手袋をし、犯

行のためだけの服や靴を買い（遠方のチェーン店で世に多く出回ってるデザインのをマスクや帽子をして買うことにした）犯行後は速やかに焼却処分すればまず大丈夫だろう。寝てる杉本の首を力任せに締めれば大した抵抗も無く殺害出来るはずだ。争った形跡の心配も無い。

問題となるのはただ一つ。遺体の処理方法である。過去の殺人の事例を洗って見たが遺体を溶かして流しても、排水口の僅かな痕跡が捜査により発覚した事例があるようだ。浴槽にワセリンを塗りにくりに血の反応が出ないようにして解体した事例もあったが、その事例も世に出回ってるということは結局失敗したのだろう。そもそも失踪した人物の隣人が遺体を溶かせる薬剤や大量のワセリンを購入していたことが発覚すれば警察からはクロとして扱われるのは間違いない。素人が下手に策を弄するよりも、単純に考えた方がいいのかもしれない。いろいろな候補を挙げた結果遺体を車で運び人の訪れることの少ない山にでも埋めてしまうのが手っ取り早くかつ安全だと判断した。

この遺体の処理方法の危険は三つ。

一つは遺体を殺害現場から車に運ぶまでに目撃されることである。しかし前述したとおり街灯も少なく家までの距離も五メートルほどである。遺体を黒い袋に入れて、自分も黒い服に身を包めばよほど凝

視されない限り見つかることはないだろう。

二つ目は遺体遺棄の現場まで足を運んだことが発覚しないことである。家から車を一時間ほど走らせた郊外に、周りにほとんど民家がなくピクニックや登山に行くには傾斜が急で、木々や雑草が鬱蒼としているおあつらえ向きな山があることを発見したのでそこを遺棄現場とした。何度か足を運んだのだが（車の目撃談が累積するのは好ましくないため手間ではあったが徒歩を選んだ）深夜なら人がいないどころか辺りを通る車すら見当たらなかった。深夜に遺体を埋める際に誰かと出くわすといったことは無いと言える環境である。もつとも決行当日にたまたまその場に足を向ける人間がいる可能性はゼロではない。しかしその程度のリスクは許容しなければ殺人は犯せないだろう。

杉本が失踪したと思われる日の前後に、深夜隣人が不自然に車を出していたとなれば関与を疑われるのは当然予想できる。現代、我々の頭上には至る所に監視カメラがあり、それは遺体遺棄の山までの道のりも例外ではない。監視カメラを追っていけば私がどこに行ったのかはすぐわかるだろう。よつてなんとしても失踪事件との関与が疑われるのは避けなければならぬ。私は殺害計画を実行する一ヶ月ほど前から夜釣りを始めることにより深夜の外出の言い訳が立つ環境を整えることにした。殺人事件とし

て扱われるならともかく失踪事件としてなら隣人の足取りまでは詳しく調べられないだろうと考えるしかなかった。

もし遺体が見つかった場合衣服や靴、車のタイヤにその山の土や木々が付着しているのはまずい。上記したように衣服や靴は焼却処分する予定のためいとして、車のタイヤが問題だろう。タイヤを交換することも考えたが特に交換するだけの合理的な理由が思いつかなかった。隣人の失踪時期の前後に不自然にタイヤを交換していたとなればいかにも怪しい。隠蔽のつもりが藪蛇になる可能性が高いように思えた。不本意であるが洗車を徹底することしか思いつかなかった。

三つ目は遺体が見つかることである。いくら人が入らない僻地の山と言っても酔狂な人間がピクニックをしたり、将来的に土砂崩れや開発計画が発足すれば遺体が見つかる恐れはある。遺体、それも他殺体が見つかった場合、結局は消去法により私に疑いがかかるだろう。だが発覚が遅ければ警察の追及を逃れられると私は確信していた。遺体が見つかった場合一番問題となるのは監視カメラである。監視カメラについて詳しく調べた結果、設置しているのは自治体や設置場所の管理会社であり、映像は保存容量の都合により普通一ヶ月、長くて三ヶ月程度で消去されていくことがわかった。動機も無い、殺害の

証拠も無い、遺体遺棄現場に足を運んだ事実も確認できない。こうなればいかに警察が私を追及しても私を有罪にすることも、自白させることもできないだろう。監視カメラについて考えると失踪した杉本の足取りを調べる際にも利用されるはずだ。今の季節は冬なので杉本は外出の際によくフードを被っている。また自宅の周りには監視カメラが少ないのを確認したのでそこまで厳密には足取りを追えないだろうと判断した。もし仮に監視カメラを調べて杉本の足取りを追えず不自然だと判断されても、そこから私の殺害にまでは中々結びつかないだろう。

私は改めて殺害から遺体遺棄までの流れを確認した。まず決行の一ヶ月前から数日に二回の夜釣りの習慣をつける。始めた動機を説明できるように釣り漫画を買う念の入れようだった。杉本は老人らしく早寝の人間であった。チャイム、ノック、電話を駆使して確認したのが夜の十二時には確実に寝ていた。よって深夜十二時に杉本宅に侵入することを決めた。

殺害当日に初めて侵入するのは不安要素が大きかったため一回だけ予行練習を行った。鍵の掛かっている台所の小窓から侵入を試みたが思ったとおり問題なく成功した。そこで私は杉本宅の間取り（外観と外からの調査である程度把握はしていたが）と杉本が確かに寝ていることを確認した。

ベッドで寝ている杉本を確認した瞬間私は全身が沸騰するかの様な感覚に襲われた。今すぐにでも目の前の老婆を殺したいという強い衝動に駆られたのである。今まで感じた怒りによる衝動ではない。純粹な殺人衝動に感じた。今回は確認のためであり殺人のために侵入したわけではない。私は必死に理性を働かせ杉本宅を後にした。

家に帰り私は深呼吸をし自分を落ち着かせようとした。今まで殺害計画に熱中することにより日常で怒りを感じるものが少なくなっていた気がする。その反動からか対象を殺せるとなった瞬間殺人衝動が猛烈に私を支配したようだった。昂ぶる心を押さえつけ私はより具体的な流れを考えることにした。

一ヶ月以上夜釣りを繰り返し、夜出掛けることが不審ではない環境を作り上げた私はいよいよ決行日を決めることにした。私の出勤時間は基本的に朝が一ヶ月に一回ほど他の社員や業務の都合上午後から出勤することがある。私はそのシフトになるまで待ち、その前日に殺害を決行することにした。仕事が午後から始まるのであれば夜釣りに行くこともそう不自然ではないし、決行日が平日であればその分夜出歩く人間も少ないためやりやすいだろう。

決行日の深夜十二時に前述した衣服を身に纏い、予行練習通りに杉本宅に侵入。侵入後は速やかに杉本の寝ているベッドまで行き絞殺を試みる。杉本の

首に紐を巻きつけそれを柱に強く括り付け思い切り杉本を引っ張る。椎骨動脈を閉塞させる所謂首吊りのような状態にして殺す手法をとることにした。人が一人入るカバン（杉本は年相応に小さかったため入手は容易であった）に杉本を押し込み窓から出してそのまま車のトランクに押し込む。後は目星を付けておいた山に死体を遺棄するだけである。前述した事前調べで山に向いたときに穴を掘っておいたので、そのままその穴に埋めたら、念のため夜釣りに行った実績を作っておくため近隣の釣り場に行く。殺害計画を頭のなかで繰り返す度に胸が高鳴るのを感じた。実際に人を殺せる、殺すということに浮足だつてしまっている。この心理が殺害時に悪影響を及ぼすことを懸念して私は必死に自己を落ち着かせるため深呼吸や瞑想に努めた。今思えば怒りを沈めるためにこれらの手段を取らなかったのは私がそれだけ怒りという感情に全てを支配されていた証なのだろう。

瞑想中携帯が鳴った。私の携帯を鳴らすのは職場の人間だけであり、この携帯は私の乾いた人間関係を象徴していると常日頃感じていた。水曜日、午後から出社してほしいという趣旨の連絡を見た瞬間私の心臓がドキリと高鳴った。

ついに殺害計画の条件が全て揃った。殺害実行日の前日火曜日、本当なら仕事を休みたかったが警察

に疑われる要素は少しでも減らしたい。私は少しでも自然に、あるべきままに業務に努めたが頭の中では殺害計画を何度も繰り返していた。

帰宅し、深夜十二時を待つ間私は体の震えが止まらなかった。この震えは喜びから来るものなのか、あるいは恐れから来るものなのか。武者震いの様に感じたがそのどれにも当てはまらない気がした。恐らく殺人を犯さないと味わえない震えなのだろう。私は自分の置かれた状況に酔いしれた。時計の針が日付を変わったことを告げる。イレギュラーな要素が無ければまず成功するだろう。私は犯行のために用意した衣服に身を包み、杉本宅に足に向けた。

「この度は突然のことで……お悔やみ申し上げます」
喪服に身を包んだ私は頭を下げ、香典を差し出した。

なぜこのような状況になったのか。結論から書こう。イレギュラーな要素が発生した。殺害決行日、杉本宅に侵入した私が目にしたのはリビングに横たわる杉本の姿であった。全く想定していなかった杉本の姿を見た瞬間私はギョッとした。まずい。私の計画した殺害方法はベッドに寝ていることを前提としたものだ。リビングで寝られていては殺害方法はこの土壇場では変える必要が出てくる。自分でもおかしいのだが殺害方法のことがかり考えていたので、

杉本の姿の異様さに気づくの十秒はかかった。杉本はソファや椅子ではなく床に横たわっていたのである。普通の人間、ましてや老婆はいくら眠気が強くても床で眠ることはないだろう。

まさかと思い私はそつと杉本に近寄り脈を測る。脈は、無かった。

私より先に誰かが杉本を殺したのでは。そんな馬鹿な考えが最初に頭をよぎったがすぐに考えるのをやめた。殺害が実行出来ない以上今すべきことは杉本の死因を考えるのではなく、この場を離れることだろう。私はすぐさま侵入してきた窓に戻る。杉本が死んでいるという異様な事態に冷静さを失っていたのかすぐさま窓から飛び出しそうになったのをすんでのところで止める。小さく深呼吸して外に誰も居ないことを確認した私はそつと窓から出て、自宅へと帰っていった。

自宅に帰った私は落ち着いて大きく深呼吸をして一連の事態を思い返す。私が殺そうとした杉本は死んでいた。はつきりしているのはそれだけである。現場で思いついた誰かが先回りして殺したというのはまずありえないだろう。思い返してみれば杉本に外傷があるようには見えなかった。杉本の年齢を考えれば自然死が妥当であろう。ともかく杉本殺害のために練った計画、労力は全て無駄となった。現実を受け止め冷静になった私は怒りを通り越して虚無

感を覚えた。一筋の涙すら流していた気がする。その日、私は仕事を無断欠勤した。

杉本の死は、それから四日後に発覚した。連絡が取れないことに心配した娘が杉本宅で死体と対面したとのことだった。どうやら死因は脳出血だったらしい。当然だが事件性は無いと判断され私の不法侵入が発覚することは無かった。杉本の死が発覚するまでの四日間私は虚無感に支配されて日常を送っていた。自身の殺人衝動を認めてから今に至るまで人を殺すことのみ考えていた。その動機は自分の怒りを取るためである。確かにその試みは上手くいった。私の心は殺人衝動に支配され怒りを抱くことが大きく減った。

入念に準備した殺害計画が水泡と化した。まるで人生最大のドミノがあと一歩で完成するという瞬間、全て崩されたようだった。それにもかかわらず私の心は怒りではなく虚無感に支配されている。今、喪服に身を包み杉本の遺影と相対していても怒りより先に生き甲斐を奪われたかのような虚無感に支配されているのだ。

それにしても——殺そうとしておきながら神妙な顔で遺影に向かい合い、さらには杉本の娘にお悔やみを申し上げていた私の姿は、客観視したら相当間抜けの様に思える。そう考えると思わず笑いそうに

なつたため、軽い鳴咽の振りをして誤魔化すのだった。

殺そうとした杉本が自然死していた。まだまともな感性が私に残っていたなら「人の道を踏み外そう」としていた私を止めるために神が事を成したのだ」などと考えていたかもしれない。しかし私の心にあるのは一つ、虚無感だった。

殺人衝動を満たせなかった私はまるで抜け殻のようだった。最初は怒りを解消するための手段であつたはずの殺人が今や目的となろうとしていた。再び自分を取り戻すためにはもう誰でも構わない。殺すしかない。そんな妄動にも似た考えが私を支配していた。

最初に通リ魔殺人を考えたのだが、ここでもネットになつたのは監視カメラの存在であつた。自宅の近くで通り魔殺人をするわけにはいかないが、かといって遠くに足を運べばその分目撃の可能性も高くなる。凶器の入手系統や職務質問の危険性も含めると現実的な案とは言えなかった。

次に思い立ったのは自殺志願者を殺すことだった。集団自殺を募集してところに紛れ込み、その中の一人を言いくるめて二人きりで自殺しようという。これなら自殺に見せかけて自分の手で殺すことが可能かもしれない。私は早速インターネットで集団自殺の募集サイトなどがないか調べてみた。しか

しインターネットがアンダーグラウンドな世界だったのはもう何十年も前のことらしい。今は規制が強いのか、あるいは自分のような素人には見つけれないような地下深くに潜つたのか。それらしいキーワードで検索をかけてもついぞ見つけることは出来なかった。

自殺について検索しているとタイムリーなことに付けっぱなしだったテレビのニュースが今朝起きた自殺を報じていた。朝早くに会社員が電車に飛び込み自殺をしたらしい。私は妙なシンクロに苦笑した。

そのとき出勤していたサラリーマンは大変だな、と通勤時の混雑を多い浮かべた瞬間私の脳裏に電撃が走った。朝の通勤ラッシュ時、ホームには人が多く並んでいる。先頭の人間のすぐ後ろに並び、電車が来た瞬間その背中をそつと押して線路に突き落とし、しまえば、それは私がその人間を殺したも同然ではないか。通勤ラッシュ時、後ろに立つ人間が前に詰めたことにより背中を押されるというのはよくあることである。その度に怒りを感じていたのが今となっては懐かしい。ごく自然に後ろの人間に押された風にして先頭の人間を押すことはそう難しくないように思えた。飛び込み自殺などありふれている。前に並ぶ人間と何ら因果関係が無い、ごく普通のサラリーマンである私が殺人を犯すなど世間も警察も考えないだろう。恐らく自殺と判断されるはずだ。

もし仮に警察に取り調べを受けても後ろの人に押されたと言ひ張つてしまおう。なんせ動機が無いのだから言い逃れるはずだ。仮に言い逃れられなかった場合の懲役も覚悟の上だ。それほどまでに私の心は殺人に飢えていた。

直接手を下せないのは残念だが杉本と同程度の好条件の殺害対象が見つからない今、最良の殺人方法に思えた。抜け殻だった私の体に再び血が流れるような感覚が襲った。この手しかない。明日にも実行しよう決めていた。

朝、目覚ましの音により目を覚ます。杉本を殺害する予定だった日以来の清々しい目覚めだった。いつもと変わりにく出勤の準備をしたのだが、ふと気づくと鼻歌を歌っていた。鼻歌を歌うのなど何年ぶりだっただろうか。こんな浮ついた心では何か思わぬ失敗をするのではないかと思つた私は洗面所に冷水を溜め、顔を浸した。

顔を上げた鏡の中の私と目が合う。思えば鏡を見るのも久々な気がする。私はこんな顔をしていたのか。久々に顔を突き合わせたそれは昔と何かが変わった気がした。なんとなく鏡像と目を合わせているとまるで自分が自分でないような感覚に襲われ、どこまで吸い込まれそうな錯覚に陥った。ふと我に返り気がついた。

変わったのは目だ。

黒目の中がどことなく濁っている。そう、中央を見つめて初めて分かったのだが確かに濁っているのだ。「これは人殺しの目なのだ」なんとなく私は直感した。この何かに取り憑かれたかのように濁っている目こそ人殺しの証なのだろうと。

いつもの駅のホームについた私は電車を一本見送り、ごく自然に列の二番目に立った。目の前に立っているのはくたびれた中年男性であった。猫背気味の背中が人生に疲れているような印象を与える。この男を突き落としてもテレビでコメンテーターが現代社会の闇を語ってお終いだらう。次の電車がくるのは三分後だった。三分後この男が死ぬ。三分後この男を殺す。そう考えると浮足立ってしまった。今思えばそれがいけなかった。そわそわしていた私は無防備な背中を押され、目の前の男のかかとを踏んでしまったのだ。中年男性がこちらを振り返る。まずい、警戒されたか。私が思わず動揺しているとその男は軽くこちらに笑いかけ、頭をペコリと下げるとスッと隣に一步移動して、隣にどうぞというジェスチャーをした。

その瞬間、まるで私に取り憑いたなかがスッと消えていくような、そんな感覚に襲われた。久々に触れた人の優しさや思いやり、それが私の怒りや殺人衝動を溶かしていくかのようにだった。

私はその男に会釈をすると一歩足を前に進めた。そして今まで自分は何を考えていたのだろうと自問自答をしていた。人の悪意ばかりに敏感になつていて優しさや思いやりというものを忘れていたのか。その結果が隣人や隣の男の殺害などとはどうかしている。私は急激に正常な感覚を取り戻していった。

自分の異常さに改めて気づくと同時に、一線を踏み越えなかったことに安堵した。そう、私は人間としての一線を越えようとしていたが、寸でのところだと思いとどまることが出来たのだ。杉本の死といふこの優しい中年男性に巡り会えたことといひまるで神が一線を越えさせまいとしているようだった。

私は自分の幸運に感謝した。ああ、もうすぐ電車が来る。また日常に戻ろう。今度からは自分から人に優しく思いやりを持って接しよう。そうすれば世界も優しくなるはずだ。

私がそう考えた瞬間不意に衝撃を感じた。気づくと私は線路に落ちていた。思わず顔を上げると驚く中年男性の隣で、恐らく私の後ろに立っていたであろう男が、無表情にこちらを見下ろしていた。

その男の目が、鏡像と同じ目をしていることに気づいた次の瞬間、電車の警笛がまるでシャッター音の様に聞こえ、急に全てが闇になった。

作者のコメント

この作品は主人公が自分を線路に突き落とした男が自分と同じ目をしていることに気づいてから死ぬまでの間に、自分がなぜこうなったかを回顧しているという作品です。

自分の隣人が、駅で出くわす赤の他人が、平気な顔して自分を殺そうと企んでいる。まるで被害妄想の様ですがその妄想が実は現実だったら。そう考えると怖いというのが物語の原点でした。

人殺しは皆等しく恐ろしい存在だと思いが、あえて順序を付けるなら営利目的で殺人を犯す人より、自身のフラストレーションを発散するため人を殺す方がより怖い気がします。

自分の周りにいる人が実はそんな恐ろしい存在かもしれない。そんな恐ろしい存在は日常生活を送りながら誰も知らないところで虎視眈々と殺人を計画しているかもしれない。そしてそれは特別な一人ではなく、何人もいるのかもしれない。

あまり考えすぎると自分まで被害妄想を発症してしまいそうなのでここで筆を置きます。

イデア旅行記

そこは世界でただ一つだけの国だった。

知識を正方形の『触れられる情報体』に変換して売ったり、肌で得た経験を脳から抽出して大きな丸い球体に変質させてから買い取るといった活動が、この国の一大産業となっている。

私はそんな不思議な国、イデア共和国を訪れた。

私は旅好きな、経済学を専攻するごく普通の学生だ。

中国やオーストラリア、アメリカやロシアなどの大国から、ニュージーランドやパナマにマダガスカルなどの小さな国まで色々な国に訪れてきた。

基本的に一人旅が好きで、我が身一つで困難も快楽も発見もしてきた。

それは今も、これからも役立つと信じている。そんな私の目に留まったのはとあるネットブログの記事だった。

『知識が取引される国、イデア共和国に行ってみた！』

私はその記事の内容が気になり、トピックのページを開く。

最初に目に入った文にはこのような事が書かれていた。

『イデア共和国は世界にただ一つだけの知識取引する摩訶不思議な国！ イデア共和国は大西洋に浮かぶ小さな島国で、日本では知名度が低いものの密かに注目を集めています。この国の一大産業は知識で、人々の頭の中にある知識や経験によって培った技術などを『触れられる情報体』に変換し、それを他者に移せるというもの。私も自分の知識を売ったり、他の人の知識をもらったりしました。知識を取り込んだ感想としては、お店で買った知識がまるで元から自分の知識の様に残っています。これは知識を得た人にしか分からないと思います！ この記事を見た貴方もこの不思議な感触を体感してみたいかがでしょうか！』

記事には執筆者が現地で取った写真がいくつか掲載されていたので一枚一枚見てみる。

経済学部
現代ビジネス学科 2年

手塚 航

執筆者は市場に売っている『固形化された知識』という物を買ひ、今までに無い、新たな知識を得たらしい。

一枚目の写真を見ると『固形化された知識』はどれも七色に光る綺麗な正方形で、中ぐらいの大きさの段ボール位の大きさのものから箱根の寄木細工と同じぐらいの大きさの物までまとまりがなく、テントのような市場の出店の中で所狭しと並べられ、それがどういいう知が固形化されているかを表すのであろうラベルが貼られている。

下の方を見ていくと『固形化された技術』に関する記述も見つけた。

『この島で取引されているのは正方形の知識だけではありません。人が経験によって得た体感的な技術も『固形化された技術』として売られています。こちらは七色に光っているのは『固形化された知識』と同じですが、形は正方形ではなく綺麗な球体なんです。こちらも大小様々で、大きいほど膨大な技術が詰まっています、小さいほど限定的な技